

# 恭仁宮の立地と構造

森 正

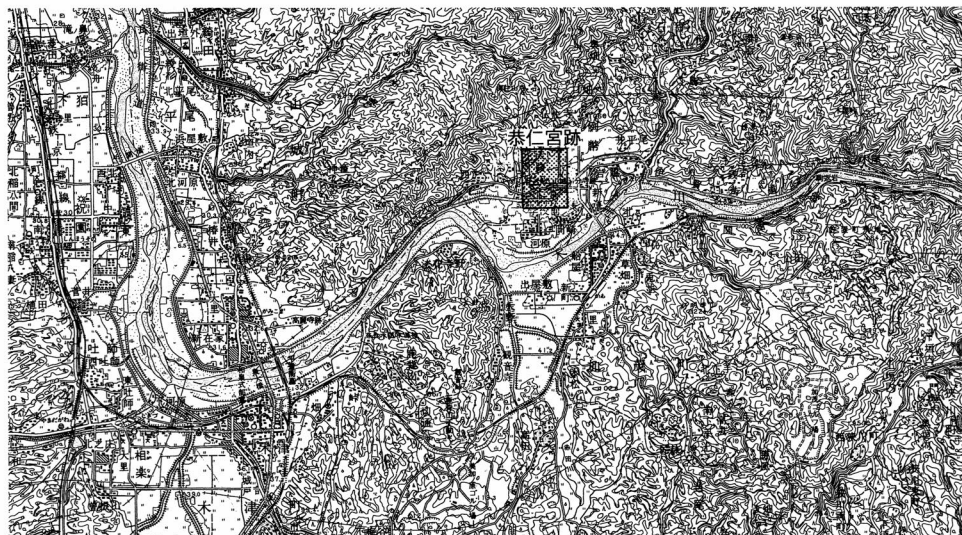
## 1. はじめに

古代山背国の南端地域に天平14年から17年にかけての時期、聖武天皇により造営された恭仁宮跡については、昭和47年以来、京都府教育委員会により、その範囲・構造を明らかにするための継続的な調査が実施されている。その成果については、順次公表され、また、中谷雅治(中谷1983)、久保哲正(久保1992・1997)、森下 衛(森下1996)らにより各時点までの調査成果を整理する形でとりまとめが行われてきた。

その後、平成8年には宮四至が確定し、かつて幻の都といわれ、その所在すら明確でなかった恭仁宮研究の展望が次なる段階に入ったと言える。

もちろんこの恭仁宮の規模・構造に関しては、実証的な歴史地理学的手法による足利健亮の研究が出发点となり、その後も恭仁宮の調査・研究に大きな影響を与えていることは言うまでもない(足利1973)。

今回は、恭仁宮四至が確定した今、改めてその立地を検討するとともに、宮の構造等について現時点での状況と課題を整理することとする。



第1図 恭仁宮の立地(S=1/100,000)

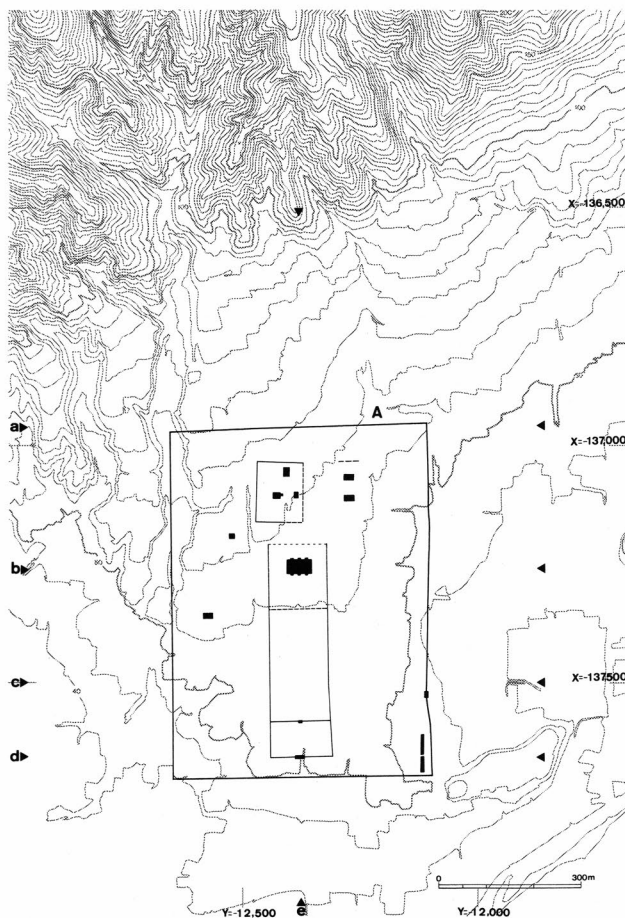
## 2. 恭仁宮の四至と宮の立地

恭仁宮の四至は、1997年の調査で宮大垣の南西角部分を検出したことにより確定した。大垣の遺構としては、東西南北の各辺および宮北東角・南西角の2か所でコーナーが検出されており、宮東面大垣では宮城門(東面南門)も1か所ではあるが検出されている。

その範囲は、東西約560m・南北750mを測り、南北に長い長方形の平面形を呈する。ただし各大垣の振れが大きく、かつ大垣心を確実に検出できている地点もないため、その規模を正確には表しにくいのが現状である。

東西幅はおおよそ1800小尺強と考えられ、その幅は平城宮の東張りだし部を除くと3600小尺であることに比べると、その幅は約1/2ということになる。南北長は、約2500小尺強で平城宮のおよそ7/10程度であり、宮域面積は張り出し部を除く平城宮の約1/3弱となる。

宮域が平城宮に比べ、このように小さいことから、足利は恭仁遷都に際し、平城宮に残った官衙もあったのではないかとする考えも示しているが、後にも記すように恭仁宮内官衙



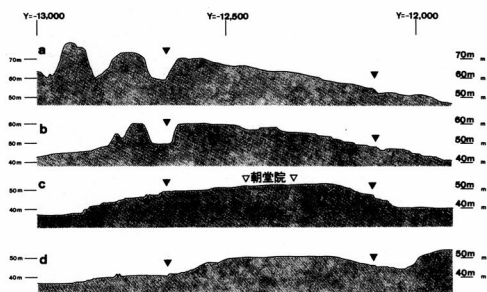
第2図 宮域および周辺の現地形等高線図

域がどの程度整備されていたものは現時点では不明である。

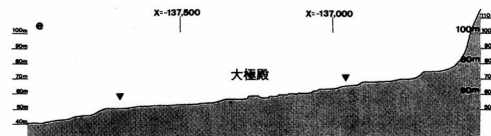
次に恭仁宮の立地について改めて検討してみる。

恭仁宮の立地する地点は、鈴鹿山脈から西流する木津川が狭い谷筋を抜け、現在の加茂町域にさしかかるところで加茂盆地とも呼ばれる小平野が開ける付近の、右岸段丘上にあたる。この辺りでは木津川は、北側の山塊からのびる段丘面をさけるように大きく南へ蛇行し、さらに南岸の鹿背山にあたり北へ方向を戻した後、さらに西流する。宮の南面を木津川が大きく蛇行する状況である(第1図)。

また、宮の北方向は険峻な



第3図 宮域現地地形断面図(東西方向)



第4図 宮域現地地形断面図(南北方向)

山塊で遮られ、東および西方向でも丘陵が迫る。木津川を挟んだ南岸には、ここもまた南東西を丘陵で遮断された沖積平野が広がり、宮域とあわせ一つの小空間としての様相を呈している。

こうした地勢の中にある宮の立地に関しては、足利以降、中谷(中谷 1983)や森下(森下 1996)らにより、宮域およびその周辺部の地形から詳細な検討がなされている。宮四至が明らかとなった今改めて宮の立地を確認しておく。

第2図は、宮域および周辺の現地形の等高線図(5 m間隔)のなかに宮域を示したものである。あくまでも現地形の状況であるため、当時の地形をどの程度残すものかという問題はあつたものの、おおまかな宮の立地環境を探る手がかりを得るための検討材料としては、なお有効であると考えられる。

宮域は現在の標高でおおよそ60 mから45 mの範囲にある。宮のほぼ中央付近を通る南北方向の断面を見ると(第4図)、宮北部の山麓から傾斜変換点を経て宮北面大垣・内裏地区・大極殿にかけての地域では、比較的傾斜がきつう25/1,000程度の勾配で南へ下がる。大極殿から南面大垣にかけては、比較的緩やかで13/1,000程度の勾配である。宮北半部が扇状地の上部に相当することと関連するが、北半部でのこの急傾斜は他の諸宮に比べると非常に大きなものといえる。さらに南面大垣を境に再び傾斜がきつくなり木津川へと至る。

次に東西方向の断面を見てみると(第3図)、北半部では西から東へ下る傾斜となっており、北へ行くほどこの傾向は強い。さらに宮の西限は深い解析谷で区切られている。南半部では朝堂院地区がある部分が最も高位で、東西の両方向に下がっていく。東西両大垣を境にさらに一段低くなり、そこからさらに低くなっていく地形となっている。

これら断面を見ると、まさに当該地域の最も良い地点に宮が造営されていることがわかる。また、この狭い宮域も当該地域の地形的な制約に起因する現実的選択(設計)という見方も可能である。

加えてこれまでの調査によって、宮周辺部の標高45 m付近より低位の地点では、おおむ



写真1 恭仁宮の立地遠望(南西方向から)

ね耕作土下に洪水に起因する砂礫の堆積が認められている。この砂礫層は、最も新しいものでは昭和28年の山城大水害時のもので、おおむね近世以降繰り返された洪水によるものである。実際に江戸時代には木津川の水位がかなり上昇したとされており、古代の地形としては現在以上に低位であったものと見られる。

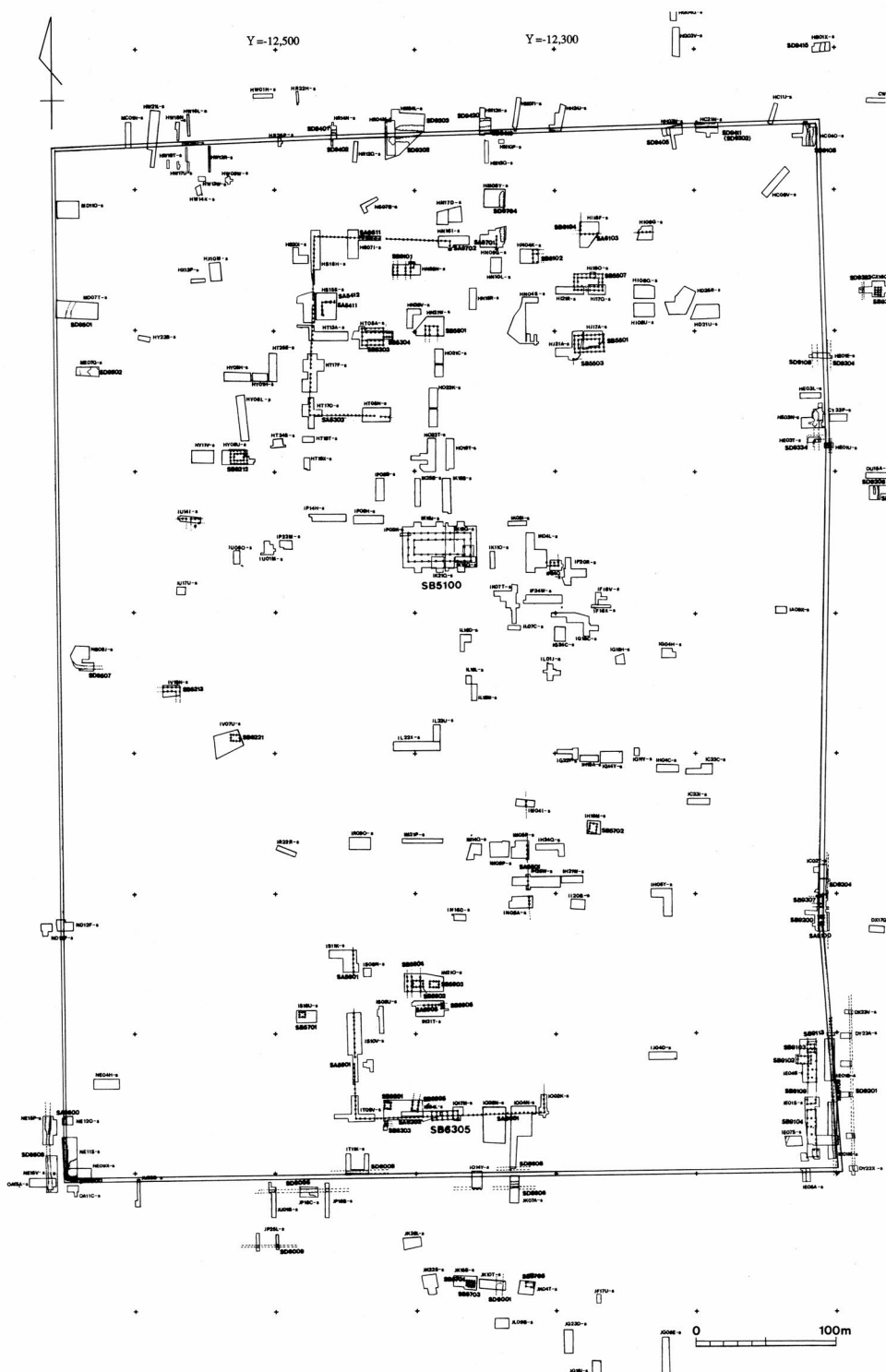
このことは木津川の南岸地域でも同様で、加茂町教育委員会による調査が実施されたJR加茂駅付近での状況(加茂町教育委員会1996)でも、現地表下のおよそ2m下層で江戸時代の道が確認されるといった状況である。

宮南西角の大垣の調査では、南面大垣を境に宮の外側にのみ砂礫の堆積が認められ、大垣基壇は宮内部より一段低い位置にある。南面大垣基壇で検出された石積みもこういった地形を考慮しての造作と言えよう。

また、宮北東角部分の外側を区切るように直角に折れ曲がる谷状地形がある(第2図のA地点)。この谷地形についてはかつて足利が宮内部の区画を示すものと考え、後に中谷が単に宮内の区画にとどまらない可能性を示唆していた。結果的には、この地形は宮の北東を区画する位置に符合することとなり、やはり宮造営に伴う人工的な地形改変と見ることができる。

### 3. 宮の構造について

次に宮内の主要施設について、これまでの調査で判明している構造と特徴をまとめてお



第5図 恭仁宮跡主要検出遺構

く。

#### 大極殿院地区

**大極殿** 現存する基壇は東西約60m・南北約30mを測る。基壇上には建物の北西隅と南西隅に原位置をとどめる花崗岩製の礎石2基と、移動および転用された凝灰岩製礎石6基が残存している。基壇の正面中央階段は石積み、基壇化粧は瓦積みである。ただし、基壇化粧は国分寺金堂として使用された最終的な姿と考えられ、恭仁宮大極殿基壇がどのような姿であったのかは不明である。

基壇上の建物S B 5100、すなわち恭仁宮大極殿については、東西9間・南北4間に復原可能で、その規模から見て、『続日本紀』の記載にあるように、平城宮中央区大極殿(S B 7200)を移建したものと考えられている。

**回廊** 大極殿院回廊についても大極殿同様に平城宮から移建したと考えられており、その手がかりとして、大極殿中心から東へおよそ200尺の地点にある足場柱穴列が想定されている。また、北面回廊及び後殿については、現状では想定する明確な遺構を欠き、今後の課題である。閤門についても大極殿前面が現在小学校用地となっていることもあり、その位置や詳細は不明である。

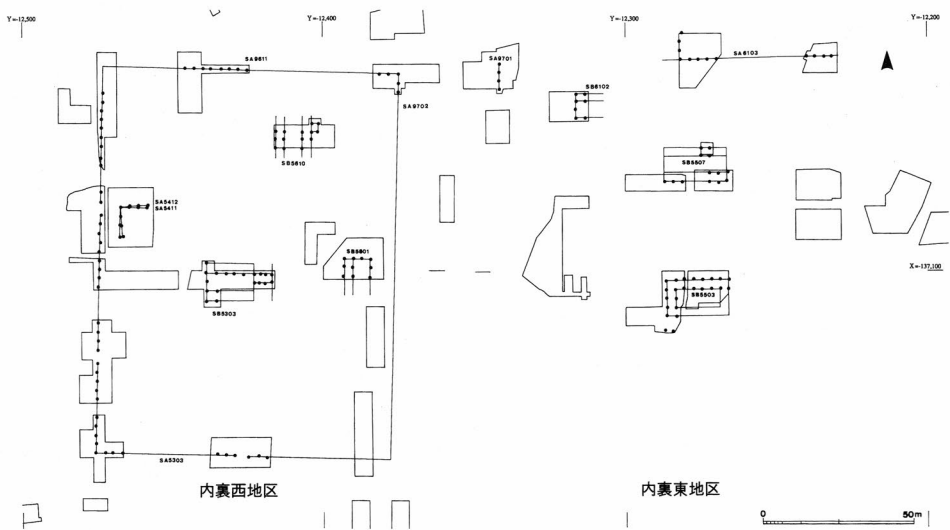
#### 朝堂院地区

朝堂院地区については、その南及び東西の3方を掘立柱塀で区画している。東西幅は約125mであり、およそ420尺に復原できるが、南端部では3間分東へ張り出しており、450尺となる。これに伴い、南東のコーナーは、鋭角に屈曲して修正が図られている。朝集殿院南門は、5間門に復原可能な掘立柱建物で、さらには、朝堂院南門の可能性のある遺構(S B 5906)及び区画塀(S A 5905)も確認されている。この朝堂を南北に区分する施設の存在は、朝集殿院の存在を示すものである可能性があるが、そうであったとしても、平城宮東区の朝集殿院が上下層ともに南北長が420尺を図るのに比べ、およそ6割の規模しか持たないということになり問題は残される。

また、朝堂関連建物は現時点では未確認である。

#### 内裏地区

大極殿北方の地域については現状では掘立柱塀で区画された2つの地区に分かれている可能性がある。このうち「内裏西地区」については、東西約97.9m(約330尺)・南北約127.4m(約430尺)であることが確認されている。「内裏東地区」についてはその北辺を区画している可能性のある掘立柱塀が確認されているが、その他の辺は現時点では未確認である。内部には南北に2棟並ぶ庇付き建物(S B 5501・S B 5507)があり、中心建物と見られる。しかし、このように大極殿院北方域に、独立した2つの区画が存在するのか、あるいはそれ



第6図 内裏地区遺構配置図

らを取り囲む外郭的な施設が存在するのか、さらには大極殿院との関係等、その構造上不明な点が数多く残されている。

京域について

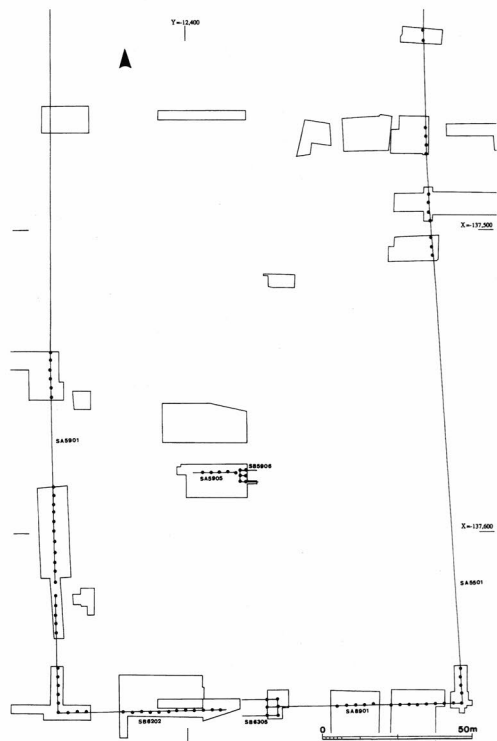
京域については現状では明確な条坊関連遺構は未確認である。ただし、以下の3地点においては条坊側溝の可能性のある遺構が確認されている。

- ①宮南面大路(二条大路)南側溝
- ②宮東面大路(東一坊大路)東側溝
- ③推定朱雀大路東側溝

しかし、いずれの遺構も部分的な確認にとどまっており、京域の条坊遺構の存在を断定できるには至っていないのが現状である。

また、京域では宮北東方向の地域においては、石敷溝(S D 9415)や桜風の礎石建物

(S B 9322)などが確認されている。この地域は宮周辺部では最も安定した平坦地が確保されており、その他に検出されている建物等の遺構も含め、注意される地域である。



第7図 朝堂院地区遺構配置図

#### 4. まとめ

以上、その範囲の確定した恭仁宮の立地を確認するとともに、現段階で判明している宮の構造をまとめ、今後の課題を考えてみた。

宮四至はほぼ定まったとはいえ、宮内部については主要施設の存在が明らかになったのみで、その構造については未だ不明な部分が多く残されている。

宮域の狭小さが、今回見たように、単にその地形的な制約のみであったとは考えていないが、宮周辺の状況を見るときやはり大きな要因の一つに挙げられるものであろう。宮大垣の角度の振れの大きさも、急を要した建設期間とともに、急激な高低差を乗り越え建設しなければならなかったことにその要因を求めることが可能であろう。

(もり・ただし=京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

#### 参考文献

足利健亮「恭仁宮域の復原」(『社会科学論集』4・5合併号) 1973

中谷雅治「恭仁宮の造作工事について」(『角田文衛博士古稀記念古代学論叢』) 1983

久保哲正「恭仁宮の造営について」(『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会) 1992

「恭仁宮」(『古代都城制研究会』) 1998

森下 衛「恭仁宮跡の四至について—近年の調査成果から—」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

以上の他、調査報告に関しては京都府教育委員会による概要報告「恭仁宮跡昭和48～平成11年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1974～2000)および『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』(2000)によった。加茂町教育委員会調査分については『加茂町文化財調査報告』第3集～第11集(1986～2000)によった。また、本文中、第2～7図は『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』より一部改変引用した。